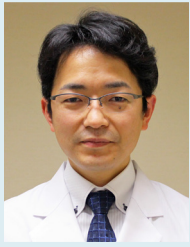




12th AASSFN 学会参加記



上利 崇

Takashi Agari

倉敷平成病院 脳神経外科

2018年4月20日から22日まで、台湾で開催されましたThe 11th Scientific Meeting for the Asian Australasian Society of Stereotactic and Functional Neurosurgery (AASSFN)に参加して参りましたのでご報告いたします。

学会は台湾の島のちょうど中心に位置する日月潭(Sun Moon Lake)の湖畔のホテルで行われました。日月潭は台湾の最大の湖で、リゾート地として台湾の方たちに人気なスポットの一つです。ただし島の奥地であってアクセスが困難なため、空港から会場ホテルまでシャトルバスが出ていましたが、私は台中市からの1時間ほどタクシーに乗って現地入りしました。日月潭は自然豊かで夕日は特に絶景と言われ、台湾八景にも選出されているとのことでしたが、私は見る事ができませんでした。湖畔内の移動手段としては地元の個人タクシーしかなく、驚いたことにメーターがついていませんでした。行先を告げて運転手と値段交渉する必要がありましたが、かなり観光地として高額でした。何人乗っても値段は同じでしたので、会に参加している他国の先生たちと移動を一緒にするようになり、親交を深めることができたので良かったです。

今回のAASSFNでは21か国、230名ほどの参加があったそうで、例年どおりneuromodulation(不随意運動症、精神疾患、慢性疼痛)、radiosurgery、epilepsy surgeryのセッションがありました。

日本からは山本隆充先生、平孝臣先生が招待講演をされ、他にも多くの先生方がすばらしい発表をされました。アジア、オセアニア外からは、Andres Lozano先生、Peter Warnke先生、Nader Pouratian先生、Todd Herrington先生、Keyoumars Ashkan先生らが招待されており、各セッションの基調講演等を聴くことができました。

DBSに関しては、会の最初のセッションでWarnke先生がパーキンソン病に対するこれまでのレビューがあり、最適な電極位置に関する話題と、すみ足(FOG)などのレポドパ耐性症状に対するDBSの役割がポイントであったと思われます。電極を最適な部位に置くためにはtargetingが非常に重要となりますが、続くPouratian先生のneuroimagingと神経ネットワー

クに関する講演では、direct targetingから、network-based imagingを用いたtargetingに移行している話でした。神経画像と、神経生理学がコラボすることで、より詳細な神経画像が描出でき、かつ治療効果の高い標的部位を決めることが可能であると、うつ病に対するDBSを例に挙げられていました。また、FOGに対するDBSの挑戦については別セッションでCoynce先生がAziz先生や大阪大学の先生方の低頻度刺激の研究を紹介した後、標的部位に関してはどの標的も苦戦しているが、PPN刺激でも限定的にはFOGが有効であると解説されました。またアルツハイマー病(AD)に対するfornix DBSに関してLozano先生が、頭頂-後頭葉の代謝が増加し、海馬ボリュームが増加することを報告され、42例のAD患者のランダム化比較試験(phase-II study)の結果についてfornix DBSの有効性について説明されました。

このたびの会では、経頭蓋MRガイド下集束超音波治療(MRgFUS)の話題も豊富になっておりました。Yonsei大学のJin Woo Chang先生がすでに多数の症例を経験しており、本態性振戦(ET)、強迫性障害(OCD)、PDに対する臨床効果を報告されました。ET、OCDに対する認知機能低下は起きていないとのことでした。Lozano先生のグループも、FUSをtractographyに基づいたVIMのFUSの報告がありました。二人の演者からFUSの今後の展望として血液脳関門をあけることでstems cellを脳内へ入れる、認知症治療薬、悪性脳腫瘍に対する化学療法デリバリーを容易にするなどの話題提供がありました。

MRgFUSによってこれまでの凝固術に対して再評価がされるのは間違いないと思われませんが、その最先端にいる平孝臣先生のGood Bye from DBS for movement disordersと題された凝固術に関する講演はかなり刺激的であり、関心も高かったと思います。ETや動作特異性ジストニアの患者さんの術前後の動画は年々パワーアップしており、その劇的な治療効果に会場からは大勢のどよめきやため息が出ていたのがとても印象的でした。

この会ではアジア圏での機能外科の拡がり、発展に関するセッションが設けられていますが、インドネシアやパキスタンの先生からの手術実績の報告があり、定位的凝固術だけではなく、デバイスを用いた刺激療法も確実に症例数が伸びていました。

今回、スポンサーの一つのPINS medicalが、機器展示においても存在感を強くしておりました。完全な中国製で、DBS、迷走神経刺激(VNS)、脊髄刺激(SCS)、仙骨神経刺激(SNM)のneuromodulation領域を広くカバーしています。中国で臨床試験を経て2016年にCEマークを取得したと聞きました。DBSシステムは3.0テスラMRIに対応、異なった頻度(高頻度、低頻度



など)を混在させて刺激を行うことができ、遠隔操作が可能な新しい機能がついています。この会でもその安全性、有効性についての報告がありました。今後アジア各国にデバイスのシェアが広がっていくかもしれません。そんな勢いを感じました。

今回の12thAASSFNは2020年5月7日から9日韓国慶州市で開催されます。また是非参加したいと思います。



日月潭



中嶋先生、野崎先生と会場ホテルの屋上から日月潭を眺める



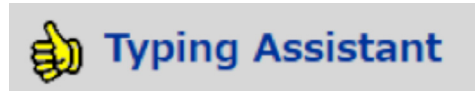
湖畔のレストランで二次会、後藤先生、馬場先生、阿部先生とSon先生たち

便利で役立つ

お勧めソフト・アプリ

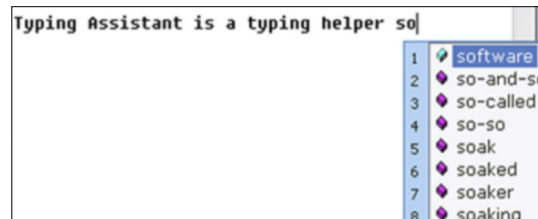
このニューズレターには皆さまからお寄せいただく耳よりな情報なども適宜アップしていきたいと思っています。今回は東京女子医科大学の平孝臣先生から日々の仕事や生活に役立つようなソフト・アプリを教えてくださいました。中には機能神経外科の領域にピッタリのアプリもありますので、早速使用してみたいですね。(編集部)

1. Typing Assistant

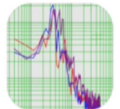


英語自動入力支援ソフト、windowsで英語の入力時に候補単語を提示してくれる。学習能力もあり自動で単語を覚えていく。

<http://www.sumitsoft.com/>

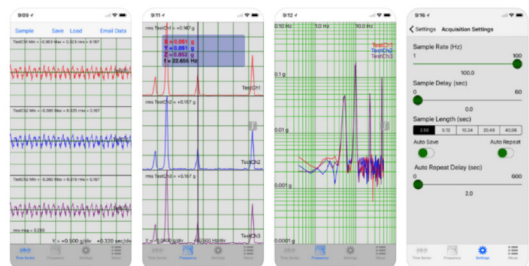


2. Vibration



iphoneで振戦の記録、解析ができる。iOSアプリ

<https://itunes.apple.com/us/app/vibration/id301097580?mt=8>



3. Office Lens



斜めから撮影した台形の文書やスクリーンを自動で長方形にする。iOSアプリ

<https://itunes.apple.com/jp/app/office-lens/id975925059?mt=8>

4. Adobe scan



写真で撮影した文書を自動でテキスト検索できるpdfにする。iOSアプリ

<https://itunes.apple.com/jp/app/adobe-scan/id1199564834?mt=8>